

一心寺かわら版

第二十二号 平成二十三年三月発行

「伊達直人の悲しみ」

二月十九日の四国新聞に、「タイガーマスク現象に思う」という論者が掲載されていました。

「昨年末から今年の初めにかけて「タイガーマスク現象」が全国に広がった。十二月二十五日に前橋市の児童相談所にランドセルが届き、送り主が漫画「タイガーマスク」の主人公「伊達直人」を名乗ったことが報じられると、同様の寄付行為が全国に拡大した。：（中略）：

多くの「伊達直人」は、自分の人生経験や育ってきた環境などへの思いをベースに寄付を行っていることがわかる。身近な他者の「役に立ちたい」という思いが、動機づけになっているのだ。そこにあるのは「抽象的な善意」ではなく「文脈をもった善意」である。「役に立ちたい」という思いは、自分が特定の社会やコミュニティの中で「意味ある存在として生きたい」という願望と重な



る。各地の「伊達直人」の手紙からは、自分が生きる意味や存在意義を確認したいという思いが強く伺える。……

「何か役に立ちたい」と思い立っても、それを具体的に実現できる回路が限定されている。つながるきっかけをつかみにくい。本当は自分の思いを伝えたい。相手とコミットしたい。しかし、そんなことを気軽にできるルートがなかなか存在しない。……

社会的な絆が失われる現在、自分が世の中から必要とされているという実感が希薄化している。善意があっても、それを実現するためのつながりが身近にはない。だから「意味ある存在として生きている」という実感をなかなか得られない。……

「伊達直人」が実名でコミニティーや他者とかかわり、自己の役割を実感できる公共空間こそが求められる。……」

全国に人を思いやる温かい心を示したこの話題も、見方を変えればこのように見えてくるということに驚きますが、核心を突いているような気がします。それというのも、以前にも述べましたが、「人間は結局一人やから……」という言葉に耳にするからです。「一人」で生きていった方が誰とも衝突することがないから気楽だと言う方もいるかもしれませんが、「一人」でいることが誰とも、何ともつながっていないという孤独の不安となっているのではないのでしょうか。その悲しい結末として起こっているのが、昨今の自殺や孤独死の増加ではないかと思えます。

前述の新聞記事を読んで、色々な方のことばが思い起こされました。

〔宗教研究者・中村みどり氏〕

「自我」とは、他者から受けた愛情や親切も含めたすべてであることに思い至る。言い換えれば、自分の愛情や親切も人々の心

の中に溶け入り、受け継がれていくのだ。……むしろ、一生を終えたときにこそ始まる、いまひとつの『生命』があるのではないだろうか。…… 人生の締めくくりでの寄付には、もしかすると、「人の心の中」に生き続けたいという願いが込められているかもしれない」

〔文化人類学者・上田紀行氏〕

「このグローバル社会の中に投げ出され、どこにも顔が見えない中で主体性というものを捉えている。顔のない所で、あるいは世界のどこに存在するのもわからない空間で、人間一人が個として投げ出された中で主体性を問うても、それは人を不幸に陥れる詐術でしかないと思うのです。ですから主体性という言葉は、存在の大地なり何らかの共同性があるところで初めて意味があるのであり、そうした大地や共同性があつて初めて我々が主体として輝くということになるはずなのに、今は話が逆になっているのではないかという感じがするのです」

〔作家・高史明氏〕

「生命の広がりとか社会的な責任とか、そうした共同体が全部差し押さえられたところには、本当の幸せはあり得ない。そのように見たのが、私は浄土教ではないかなと思うのです」

ところで、自分の思いがすべて叶う世界があるとしたら理想のように思いますが、どうでしょうか。その世界が実現するとしたら、それは、すべてを自分一人の力で成り立たせている場合でしょうか。水も米も車も家も、すべてを私が作り出している思い通りになるわけです。しかし、私にはそのような力はありません。もしそれが可能だとしたならば、他者がいれば思い通りになりませんから、すべて思い通りになるということは、私を助けてくれるもの、支えてくれるものがない孤独な世界です。

仏教の根本である縁起の教えを伝える、「インドラのネット」という譬えがあります。

「それぞれの宝石が独自の色や形をしており、また、表面の光り具合もいろいろなのです。

同じものは一つもないのです。それぞれの宝石は、ネットについている他のすべての宝石の光によって照らし輝かされ、同時に、そのそれぞれの宝石は他のすべての宝石をも照らし輝かせている。異なる独自性を持った宝石は、他のすべての宝石とネットの上で相互につながり、互いに互いを照らし合い、そして映し合っているのです」

トを表す荘嚴、七宝羅網瓔珞

〈インドラネット〉

これは『阿弥陀経』にある浄土の荘嚴、「青色青光黄色黄光赤色赤光白色白光」とある一節にも見られます。

残念ながら思い通りにならないことがあるということは、私の力、思いを超えて私を支えるはたらきがあるということです。ですから思いが叶ったら、「おかげさま」と感謝し手を合わす。また、思いが叶わなかった時も、けっして私を見捨てることのない大いなるいのちに支えられて精一杯わが身を尽くすことができた、悲しみの中でも手が合わさってきたのが念仏者です。

親鸞聖人は



「自然」（じねん）ということについて、「自」は「おのずから」ということであり、念仏の行者のはからいによるのではないという事です。「然」は「そのようにあらしめる」という言葉です。「そのようにあらしめる」というには、行者のはからいによるのではなく、阿弥陀仏の本願によるのですから、それを「法爾」（ほうに）というのです。『親鸞聖人御消息』とおっしゃられました。お念仏を称えられた方々は、「おのずからあらしめる」はたらきを感じて安心し、浄土に生まれるということとを、大きないのちのつながりの中で、この私に安心の居場所が与えられることと受け取られたように思います。

真宗興正派の大遠忌テーマは「いのち・つながり・よろこび」です。この法要が、阿弥陀のいのちとの出会い、つながりによって本当のよろこびに目覚めることができる契機となればと思うことです。



お経ってなあに？⑩「文類」

五月十五日に勤修致します宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌、並びに庫裡落成慶讃法要において、「正信偈」とともに「文類偈」をお勤めします。これは親鸞聖人の著された『浄土文類聚鈔』（じようどもんるいじゆしやう）の一部です。

『教行信証』（広文類）が仏典だけでなく、他の典籍まで引用して広い視野のもとに浄土の教相を明らかにしているのに対して、『浄土文類聚鈔』は浄土三部経と龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師・善導大師の四師の論釈を引くのみで簡略化されているところから『略文類』ともいわれます。しかし、短いながらも浄土往生の真因は本願力回向の信心であること、いわば『教行信証』の要点が述べられています。

両偈文とも一行七字で百二十行という構成で、教えの内容は、共に「信心の偈」ですから同じですが、著された時期によって表現が異なっているわけですね。重ねて説かれたところに、聖人がいかに強くその内容を伝えたかったのかが伺われます。「文類偈」は「西方」で始まっています。西方浄土といわれるように仏教では西方は、阿彌陀如来の仏国土を指します。自然界でも西方は太陽が沈みゆくところであり、夕焼けの情景は私たちに絶対の安息を約束する世界のようにです。聖人が、西方から筆を染められたところに「文類偈」の深いお心を汲み取ることができるようです。



この度の法要では、縁儀、散華をしながら賑々しく勤めます。「正信偈」との違いを感じながらお聞きいただければと思います。

五木寛之氏連載『親鸞・激動篇』に思う

本年は宗祖親鸞聖人七百五十回大遠忌の年、また、親鸞聖人が越後に流罪になってから八百四年の時を経ています。昨年出版された五木寛之著『親鸞』では、聖人の若かりし京都時代を、また、今年より始まった『激動篇』では、現在、流罪の地、越後での生活が想像力豊かに描かれています。以前、その地へお参りさせていただいたことがあるので、身近に感じつつ読んでいます。

流罪の理由として学者によりさまざま要因が挙げられていますが、当時、法然上人と親鸞聖人が説かれた念仏の教えが、特別な人しか救われないという時代の中で、誰もが平等に救われる教えであり、それが多くの民衆に受け入れられたため、権力者や他寺院からの反感を買ったことが一因となつたと言われています。その越後の地で、お念仏のみ教えは花開きます。それは、親鸞聖人が、多くの苦悩を抱えたありのままの姿でありながら、妻・恵信尼と仲睦まじく、喜びに満ちた生活をしているのを見て惹かれた人々が、集まってきたからではないでしょうか。

私たちは何かにつけて右往左往します。その右に左に往き迷う中で、真に往く道が往生の道と聞かされ喜ばれた人々が一人、また一人と増えていったのでしょうか。



（上）親鸞聖人流罪の越後上陸の地に立つ記念碑

「もしわれ配所におもむかずは何によりてか辺鄙（へんぴ）の郡類を化せんこれ猶師教の恩致なり」（師法然上人とともに流刑に処せられたからこそ、都から遠い越後という地で生死に迷っている人々に仏の慈悲を説く機会がこの自分に訪れたのである。これも師から教えを受けたからこそだと感謝し、潔く配所へ赴こう）という『御伝鈔』（親鸞聖人の曾孫にあたる覚如上人が、聖人の遺徳を讃仰するために、その生涯の行蹟をまとめた詞書）の一節が刻まれている。

本日三月十一日、未曾有の大地震が東北地方太平洋沖で起こりました。津波の映像は目を疑う恐るべきものでした。恩恵を与えて下さる大地が牙をむいて甚大な被害をもたらす矛盾、非力な人間は悲しみを背負って生まれているのだと痛感します。だからこそ、小さな力を合わせて生きていくのが人間です。何もできない私ですが、「世の中安穩なれ」と念じずにはおられません。合掌。